

九州男児

you
are
my

you are my religion

＋太陽に抱かれた牧師＋
おとこ

religion





CONTENTS



EPIISODE1	005
EPIISODE2	029
EPIISODE3	053
EPIISODE4	077
EPIISODE5	101
EPIISODE6	125
EPIISODE7	149
EPIISODE8	175
you are may religionの世界	189

EPISODE 1





まずはこの男だ

牧師
トレス・シェーカー



これから捕虜の
分け与えを行う

「タートル・アイランド」
先住民保留地

白人の捕虜を選ぶ権利は
白人に家族を殺された者に
与えられる



だから――

伝統派グループリーダー
レッド

俺は白人に妻を
殺された



!!?

こいつを妻の代わりにする!!



こいつらはどうする

いこうな
せんが
谷に捨てるまじ



私は
ちゃんと管理局に
許可を得てー

君…乱暴はー





—何を…!

言っただろう

俺はお前を

妻にする



英語が話せるということは
学校でちゃんと学んだんだろう？

こゝ婚姻は女と
するもので—

男をその代りとすることは
聖書が禁じている！



あいにく学校は
途中で追い出されたんでね

俺たちの世界じゃ
男が男と寝たっていい

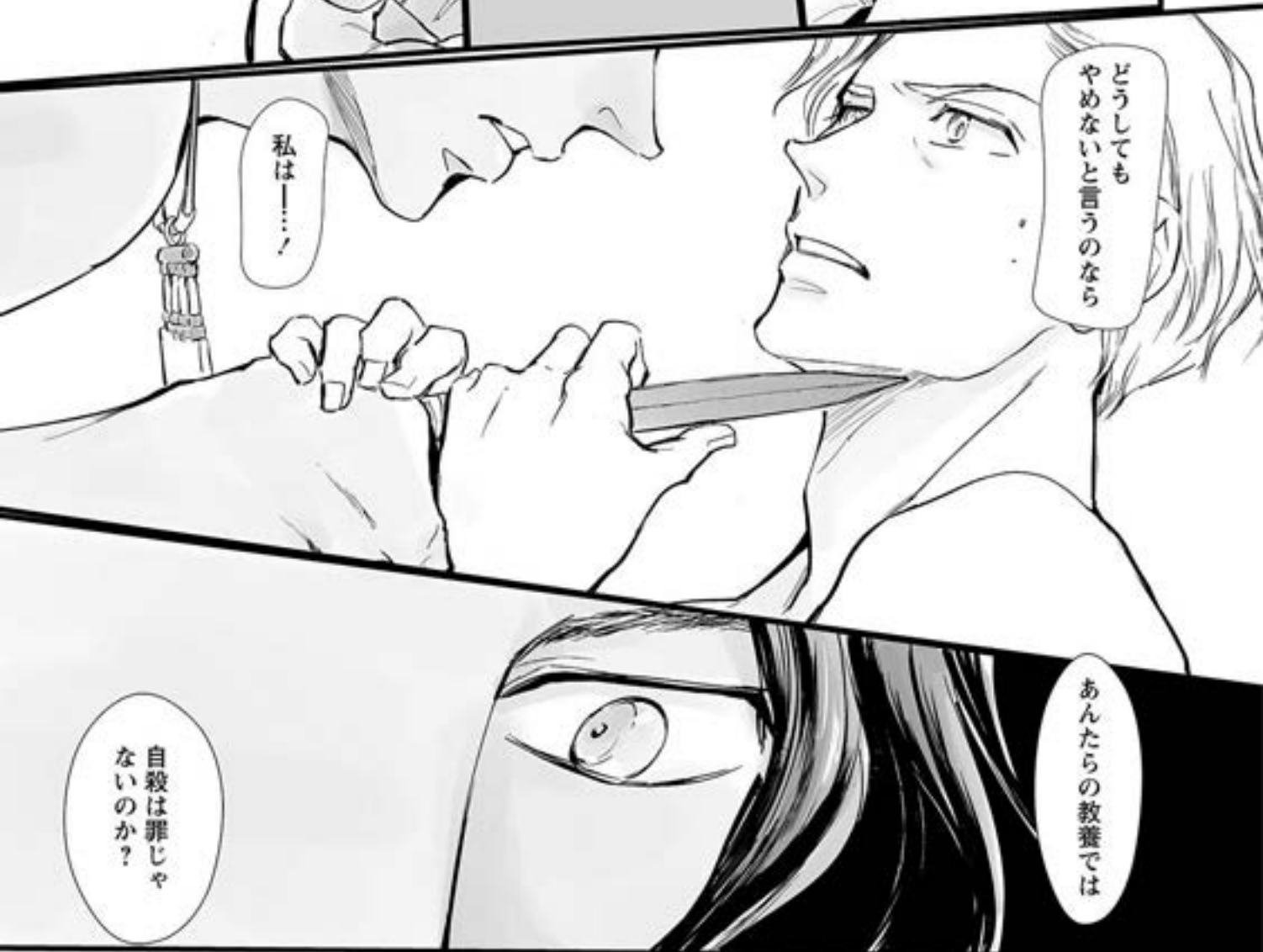
そもそもあんたらの
世界でだって

わざわざ禁じなきゃならんほど
ありふれたことだったってことじゃ
ないのか？



くそ！ 全くなんだってこんな
いかつい下着をー

ひまき
モモひき 月いっ




どうしても
やめないと言うのなら

私は...！

あんたらの教養では

自殺は罪じゃ
ないのか？




お前のような「野蛮人」に
辱められるよりは—

同じ地獄に堕ちるのでも

あ…

—




じゃあ
その野蛮人の住む地に
何でわざわざ

トーレス

私ももう年だ

そろそろ君を
主任牧師にと
考えているんだが



牧師たる者
生活面でも
夫として 親として
人々の模範とならねば

というのもあるが
知ってるだろう
うちのマリアは結婚には
もう遅い年だ

ずっと頑なだったが



相手が君であればと



私は逃げてきた

私はー



君たちを救いに来たのだ

自分の自尊心を
守るために



男としての役割が果たせなくとも

君たちが
神の教えにより
天の国に迎えられるようー

牧師として
哀れな野蠻人たちを
救ってやれるのだと

面白い



俺たちは
自分や仲間を生かす
ために祈るが

お前は紙に書かれた
神の言葉に従うため
死のうとする

それが何故なのか

お前の話を
聞いてやろう



この大陸は元々彼らのものだった

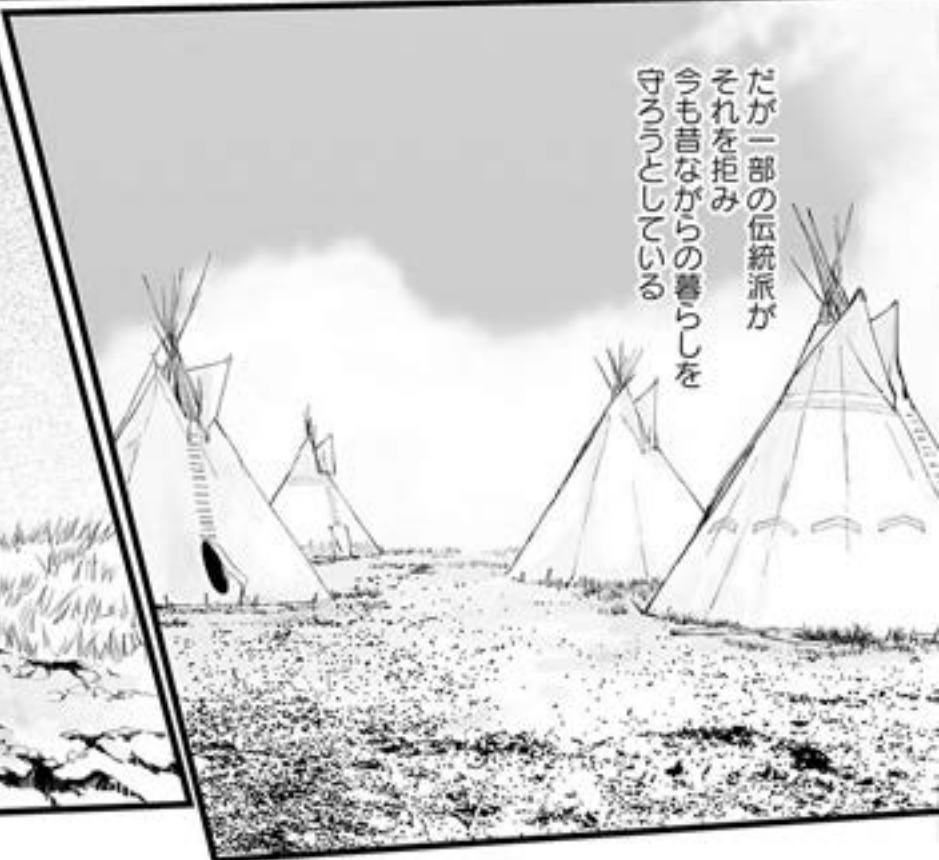
今はこの限られた地に留め置かれ
我々白人に同化されようと
している

彼らにとってそれが
唯一生き延びる道だったから



だが一部の伝統派が
それを拒み
今も昔ながらの暮らしを
守ろうとしている

彼らの生活の糧であった
偉大な獣は
もういないというのに





なあにただ蒸気で身体を
温めるだけのことさ

いえ
私は他宗教の
儀式は—

この「汗の小屋」で
落としていくといい

あんた
悪いものが溜まってる









今なんか

エロい顔になった



すぐ済むから
じっとしてろ

俺がもよおしただけ

大丈夫
触れないから



ちよっ…









ああ僕は

一体どんな罪を
犯したというんだ

どうして僕だけが



かといって
女性になりたいわけでもない

自分が自分であるままで

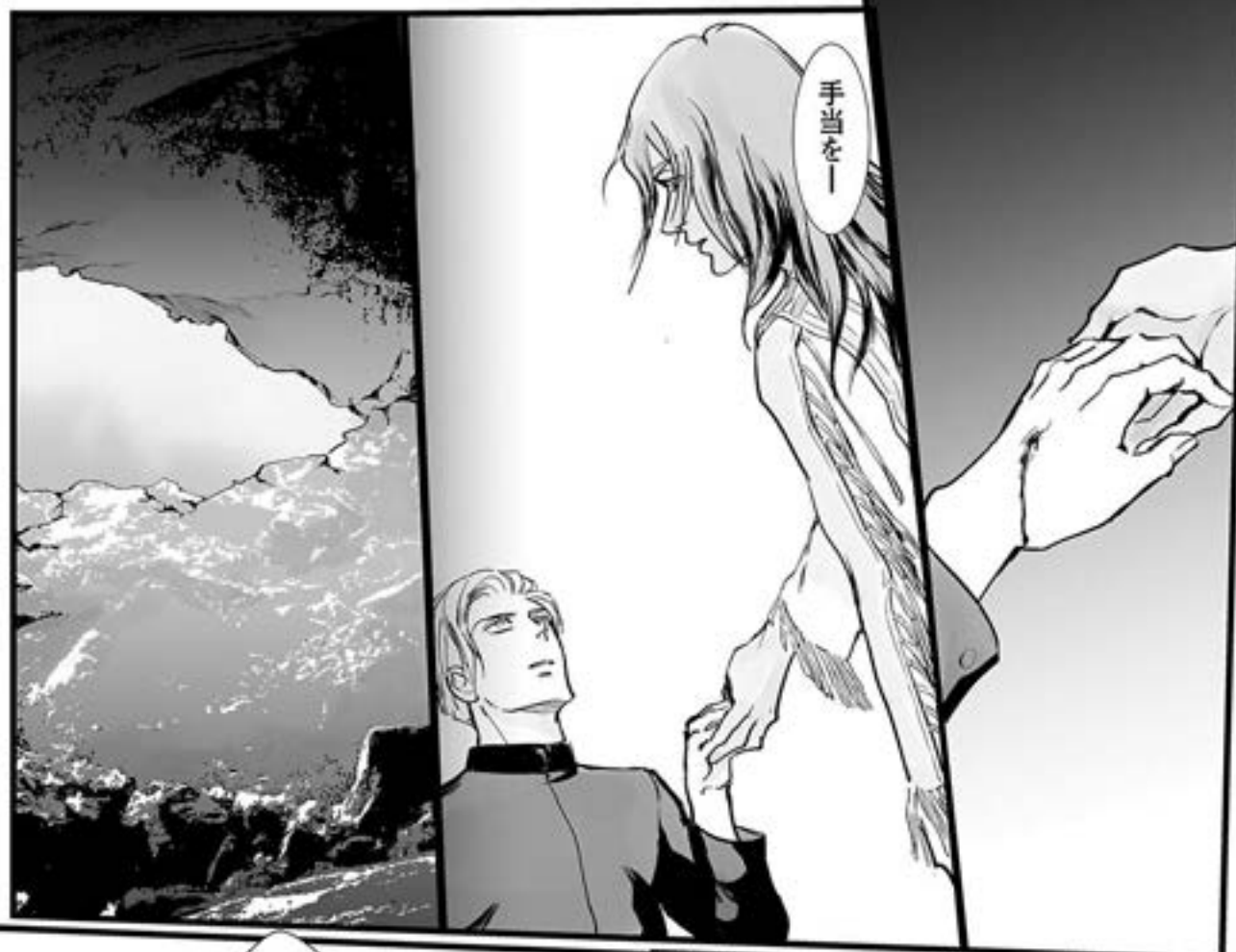


私が心を乱されるのは
男の肉体だった

あの美しい体に
抱かれたならー







手当をー



自分の思いと
反対のことをしなきゃ
ならなくなった

だがある日
「雷の夢」を見て
しまったから

俺の血は半分白人だし
レッドと違って学校にも
すぐ馴染めた

?????

ヘヨカ(聖なる道化)
イーヴル・アイ

電気や水道や車に憧れるが
ここで不便に
暮らさねばならない

泣きたい時に
笑わねばならず

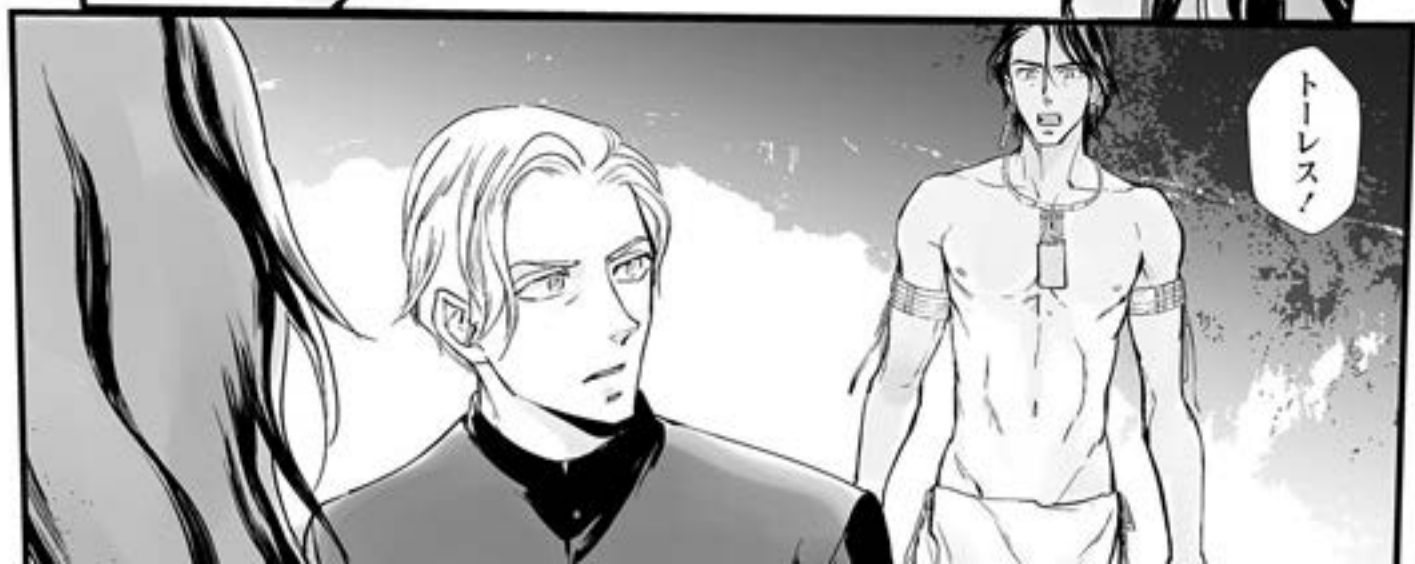
怒りたい時に
喜ばねばならない

妹が殺された時も……

俺の妹は
レッドの妻だった

俺が勤めて
白人の街でウェイトレス
をしていたが

酔った男に
執着されて





こいつはとんでもない
ベテン師で 男も女も
誰にでも手を出すんだ

こんなとこにいたら
喰われちまう



寒いのか？



—レッド…

さつきは悪かったな
お前はあーいうのは嫌いなのに

あれは—

私を辱めるためでは
なかった—?



本当に

妻を抱くように
私を抱こうと

それは

ずっと私が望んで
きたことだ

同時に最も
罪深いことだった